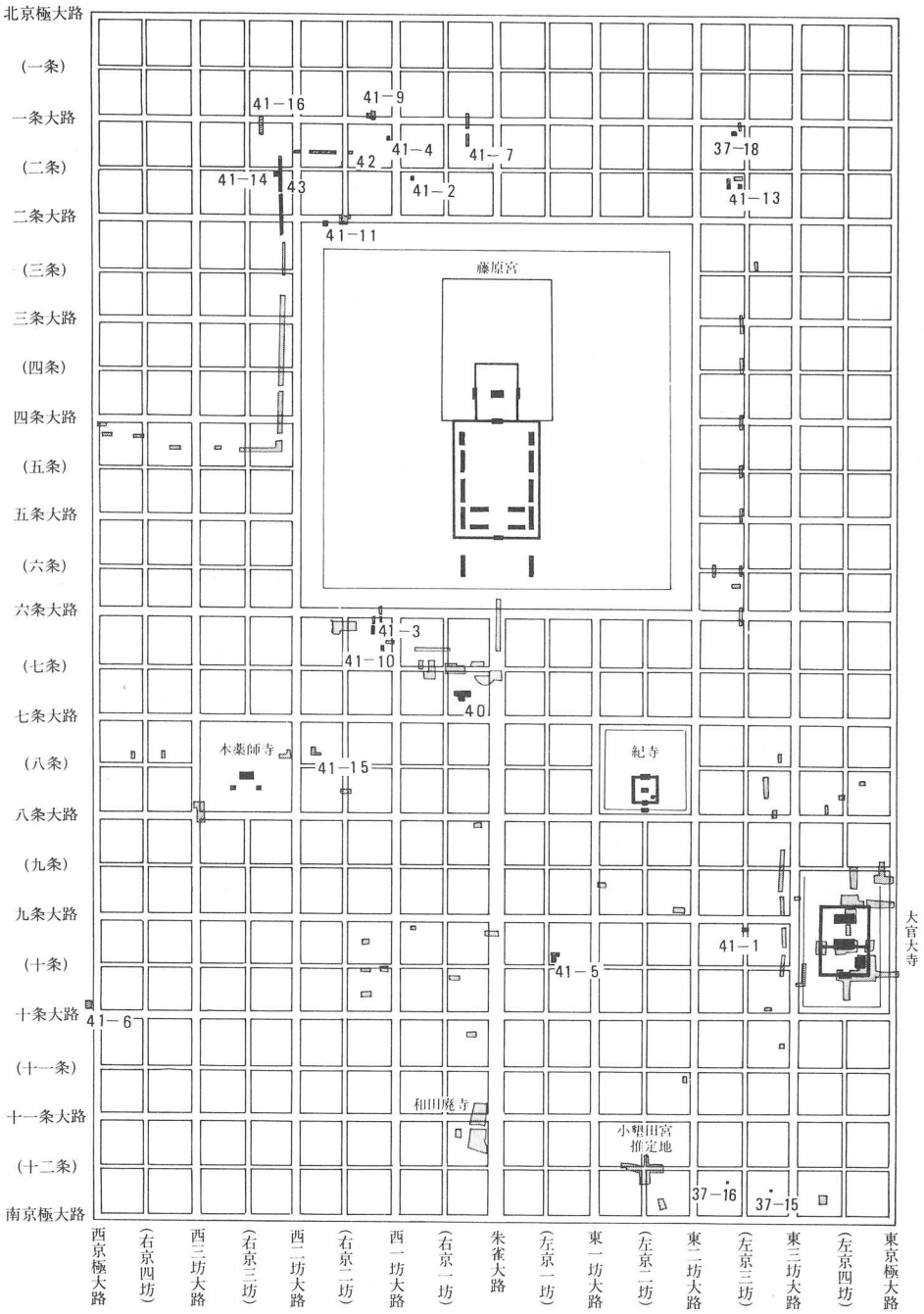
II　藤原京の調査



第８図　藤原京内調査位置図（１：20000，網目は既調査地，条坊は模式図）

1　右京二条三坊・三条三坊の調査（第39・43次）

（第39次；1984年1月～4月，第43次；1984年6月～8月）

この調査は国道165号線橿原バイパスの建設工事に伴う発掘調査であり，同バイパス関連の調査としては第4次・第6次目にあたる。

今回は藤原宮第25次調査地（概報10）の北側に続く縄手，醍醐地内から国鉄桜井線に至る延長300mの区間が対象となった。藤原宮の条坊呼称にしたがうと，右京二条三坊東南坪と三条三坊東北坪に相当し，各坪の中軸線の東側を南北に貫通する道路予定地の西半部に調査区を設定した。なお，南半を第39次，北半を第43次として二度にわたって調査を行なったが，ここでは一括して概要を述べることにする。

調査地の層序は，耕土，床土，暗茶褐色土，黒褐色土，黄褐色粘土の順である。黒褐色土は弥生式土器の包含層であり，この上面で藤原京関連の遺構を検出している。黄褐色粘土は地山であり，一部の遺構はこの地山上で検出した。

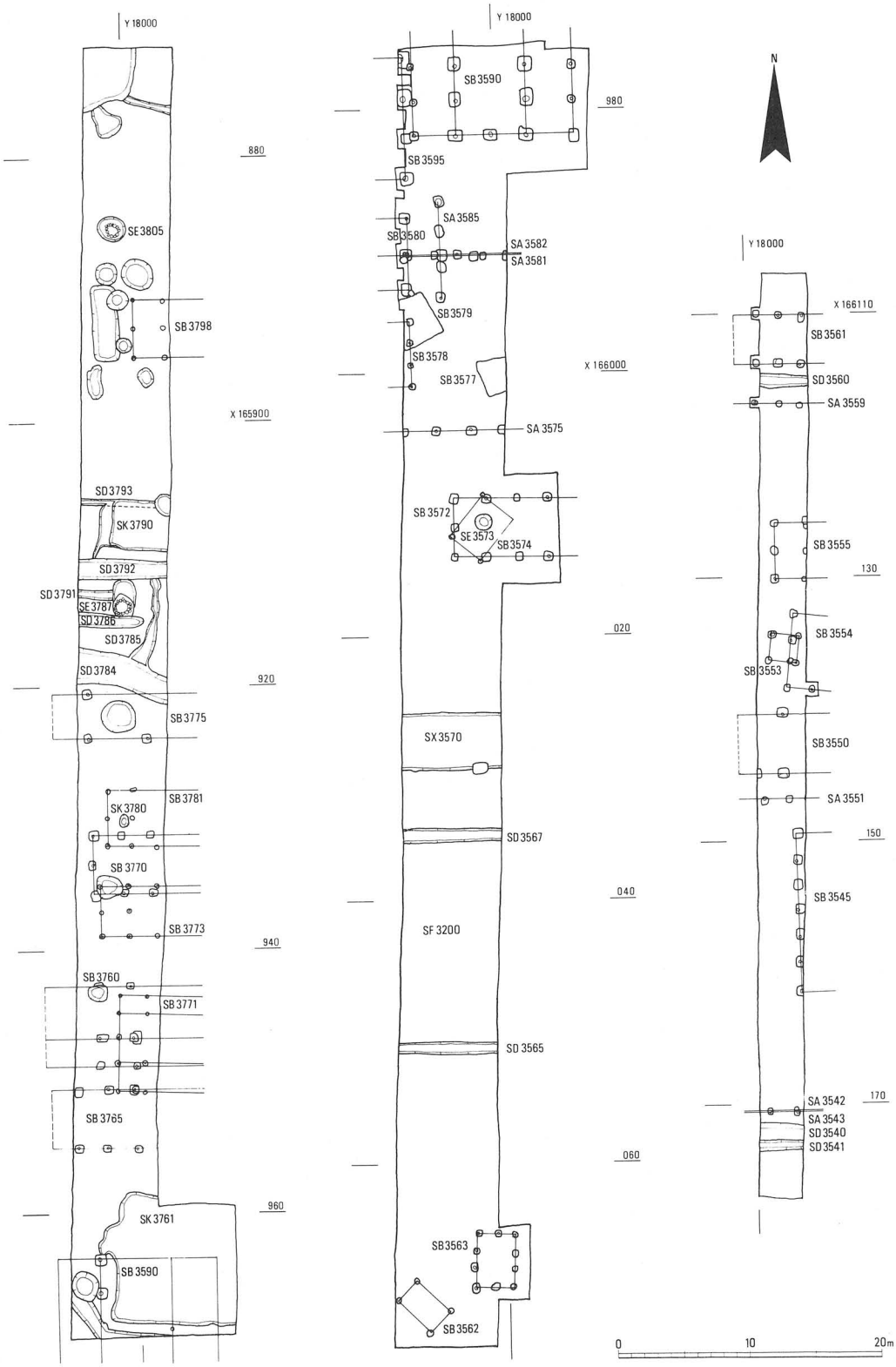
検出した主な遺構は古墳時代，藤原宮期～中世の各期にわたっている。

藤原宮期の遺構

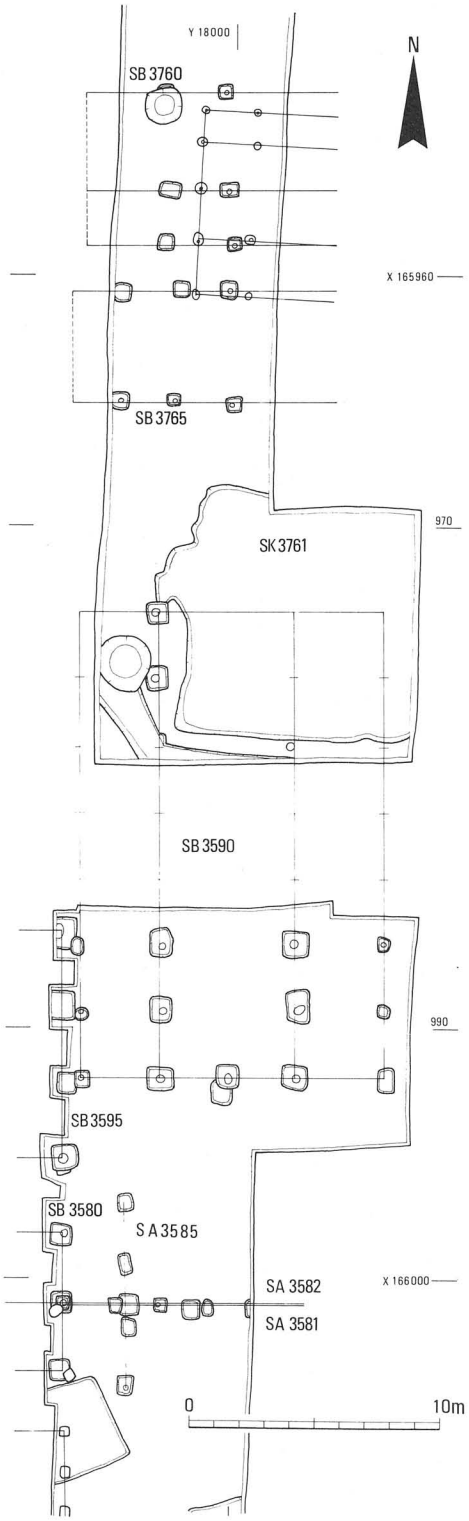
二条大路，掘立柱建物13棟，塀6条，溝2条，土壙などがある。

二条大路SF3200は道路幅15.2mあり，両側溝を伴う。北側溝SD3567は幅1.0m，深さ0.2mで，南側溝SD3565は幅0.9m，深さ0.2mである。両側溝間の心々距離は16.2mある。なお，両側溝には杭穴とみられる小穴が多数認められた。この他に条坊関係の遺構として溝SD3793・SD3540がある。東西溝SD3793は調査区の北端から南へ35mのところに位置し，幅0.4mで藤原宮期の浅い土壙状の広がりを切って掘削しており，二条条間路北側溝の可能性が高い。SD3540は調査区の南端にある東西溝である。新しい溝によって南側が壊されており，現存で幅1.1m，深さ0.2mある。その位置からみて三条条間路の北側溝と判断される。

二条三坊東南坪の遺構には掘立柱建物8棟と塀4条がある。坪のほぼ中央にあるSB3590は桁行7間，梁行4間の南北棟東西庇付建物で，建物の北半部は



第９図　第39・43次調査遺構配置図（１：500）



第10図　ＳＢ 3590 周辺調査遺構配置図（1：300）

中世の土壙ＳＫ 3761によって壊されていたが，身舎部分の柱掘形３個と柱痕跡１が確認された。柱間寸法は桁行 2.65 m，梁行は身舎部分が 2.65 m，東庇 3.5 m，西庇 3.2 m である。ＳＢ3590 の西側柱と一部重複してこれより古い南北方向柱列６間分を検出している。各柱間は北から４間までが各 3.0 m，５・６間が各 2.7 m あり，柱掘形の形状と埋土の差などから，梁行３間の東西棟建物ＳＢ 3595 と梁行２間の東西棟建物ＳＢ 3580 を想定した。坪の南半部にあるＳＢ3572は梁行２間（柱間 2.3 m），桁行３間（柱間 2.3 m）以上の東西棟建物である。塀４条のうち，ＳＡ 3581 はＳＢ3580 の東妻にとりつく東西塀で，３間分を検出している。柱間は 2.5 m 等間である。なお，同位置にあるＳＡ3582 はＳＢ3580 の廃絶後に設けられた東西塀で，柱間は 2.1 m 等間であり，４間分を検出している。ＳＡ3585 は３間（柱間 2.4 m）の南北塀であり，ＳＡ3581，ＳＡ 3582 との切り合い関係はないが，埋土の差からＳＡ3582 より新しい可能性が高い。ＳＡ3575 は坪の四等分線上に近い位置にある東西塀で３間分

（柱間 2.6 m）を検出した。

SX3570は二条大路北側溝の北4.5 mのところにある幅4.5 m，深さ3 cm程の浅い溝状の遺構で，藤原宮期の土器を出土しており，道路と宅地をしきる区画溝とも考えられる。

坪の北半部には建物4棟と土壙1がある。なお，北半部については後世の削平が著しく，柱掘形は下底部を僅かに残す程度であった。建物はいずれも東西棟とみられ，妻柱を確認できたのは1棟のみである。SB3765はSB3590の北8.4 mの位置にあり，桁行4間以上で，柱間は2.1～2.4 mとやや不揃いである。梁行総長は4.5 mである。SB3765の北に接してあるSB3760は身舎の桁行2.6 m，梁行2.0 mで，南に2.2 mの庇をもつ桁行3間以上の東西棟建物である。SB3760の北6 mにあるSB3770は，桁行3間以上，梁行2間の東西棟建物で，北半部で唯一妻柱を検出した建物である。柱間は桁行2.0 m，梁行2.2 mである。SB3775は柱穴が削平されているが，桁行4間以上の東西棟建物で，柱間は桁行2.2 m・梁行1.7 mである。北半部の建物間には直接の切り合い関係は認められないが，SB3760・3765は側柱心々で棟間間隔が1.6 mと近接していることと，柱筋が異なることから，時期を異にしているとみられる。他の建物配置との関係から，最低2時期に分つことができよう。SK3790は浅い土壙で藤原宮期の土器を少量検出した。SK3790は二条条間路北側溝と考えられるSD3793に切られている。SD3793より北側ではこの時期の遺構は検出されていない。

三条三坊東北坪の遺構には掘立柱建物5棟，溝1条，塀3条などがある。

SB3545は坪の南端近くにある桁行6間の南北棟建物で，西側柱筋のみを検出した。柱間は2.0 mの等間で，中央の柱掘形には直径20 cmの柱根があり，北端の掘形を除く各掘形の柱位置には板石を敷き込んでいる。この建物の北には東西方向の塀SA3551（柱間1.9 m）があり，さらにこれに接して東西棟建物SB3550がある。桁行1間のみしか検出していないが，梁行総長は4.5 mである。SB3555は桁行2間以上，梁行2間の総柱建物で，梁行柱間は2.1 mである。SB3561は坪の南北二分割線上にある建物である。桁行3間以上の東西

棟建物で，直径15㎝の柱根が２ケ所で遺存している。

溝SD3560は幅１ｍ前後，深さ0.２ｍの東西溝で，藤原宮期の土器が出土している。二条大路南側溝心との心々距離は64ｍある。SD3560は二条大路南側溝と三条条間路北側溝間の心々距離の二分の一（60.５ｍ＝173尺）より４ｍ程南に位置するが，溝の南側には塀SA3559があり，この組み合わせは三条条間路北側溝SD3540とその北側のSA3542（柱間2.１ｍ）との関係と相似することから，SD3560は坪の南北を二分する区画溝である可能性が高い。なおSA3542は同じ位置でSA3543につくりかえられる。

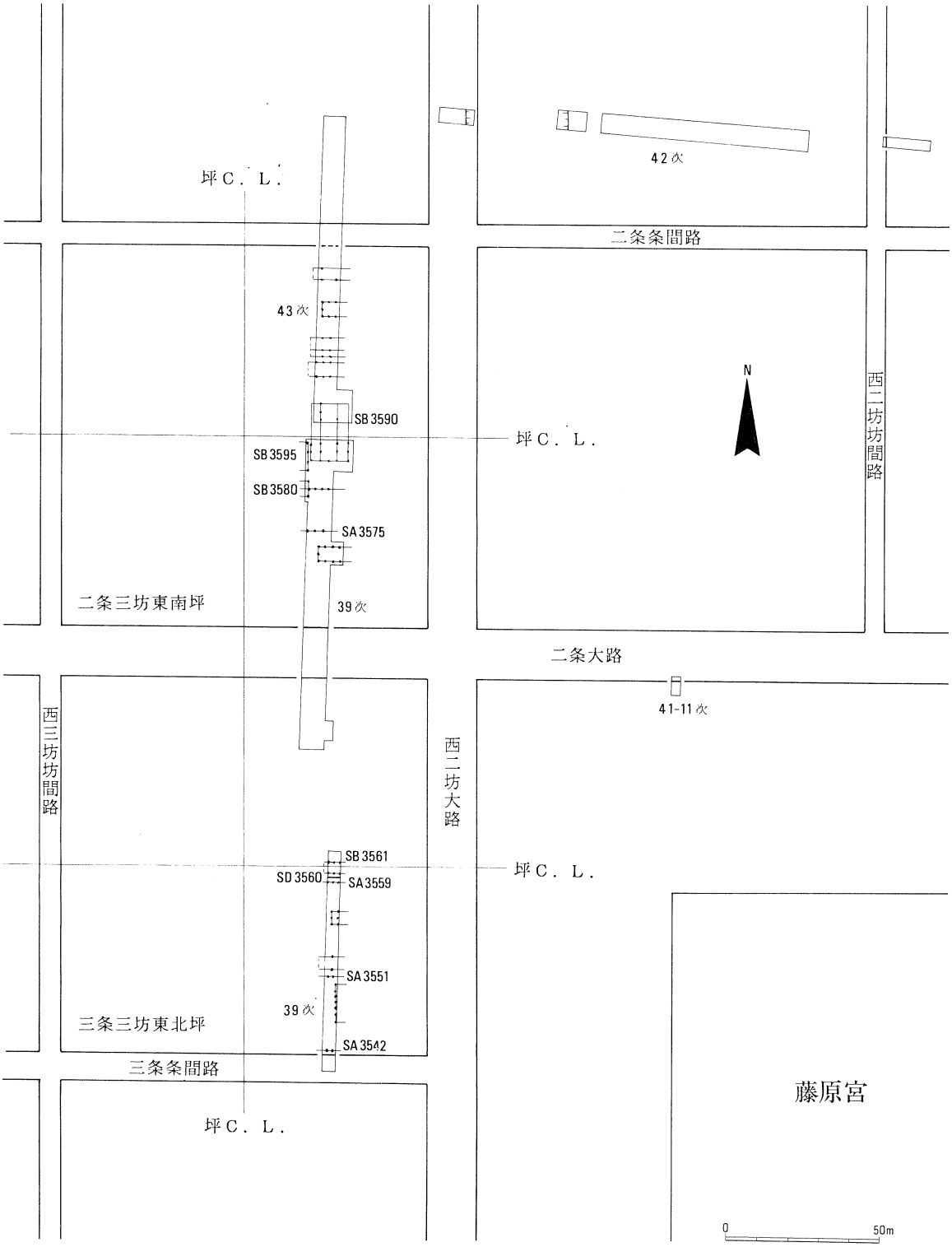
平安時代の遺構

この時期に属する遺構としては建物４棟がある。とくにまとまった配置はないが，いずれも建物方位が北に対して，東あるいは西に6°内外の振れがあることが共通している。SB3554は桁行３間の南北棟建物で，梁行柱間は1.8ｍ，桁行柱間は中央間が1.５ｍ，両脇間が2.１ｍである。SB3553はSB3554の廃絶後につくられた１間四方（柱間2.１ｍ）の小建物である。SB3563は桁行３間，梁行２間（柱間1.８ｍ）の南北棟建物であり，桁行柱間はSB3554と同様に中央間が1.３ｍと狭く，両脇間が1.５ｍとやや広い。SB3578は妻柱を検出していないが，桁行３間の南北棟と考えられる建物で，方位は北で西に振れている。桁行柱間は1.５～1.７ｍと不揃いで，総長は５ｍある。

中世の遺構

調査区南半部では井戸１基，建物２棟を検出した。井戸SE3573は径1.３ｍ，深さ１ｍの円形掘形を持ち，中央に曲物を抜取ったとみられる痕跡があり，抜取痕跡から瓦器，刀子１が出土した。井戸屋形SB3574は，桁行１間（3.９ｍ），梁行１間（3.０ｍ）の規模で，西南隅には径10㎝の柱根が残っている。SB3562は桁行１間（3.３ｍ），梁行１間（2.１ｍ）の小建物である。

北半部には建物４棟，溝５条，石組井戸２基，土壙がある。SB3771は南と北に庇を持つ桁行２間以上，梁行４間の東西棟建物で，柱間は身舎の桁行2.１ｍ，梁行2.０ｍ，北庇の出1.５ｍ，南庇の出2.１ｍである。SB3771の柱穴には柱根を残すものがある。SB3773は桁行３間以上，梁行２間の東西棟建物で



第11図　右京二条二坊・二条三坊・三条三坊周辺図（1：2000）

西から1間目には間仕切りがある。柱間は桁行2.1 m，梁行1.8 mである。SB3781は桁行3間以上，梁行2間の東西棟建物で，西から1間目に間仕切りをもち，桁行・梁行ともに2.2 mである。土壙・溝からは多量の瓦器・土師器が出土し，溝SD3785からは漆器椀が出土した。

古墳時代の遺構

南半部には古墳時代中期の竪穴式住居2棟がある。いずれも方形とみられ，SB3577は一辺が2.9 mで，深さ10㎝あり，小型丸底壺が出土している。SB3579は一辺が3.6 m，深さ7㎝前後である。なお，柱痕跡はなかった。

遺物

藤原宮期の各遺構からは少量の土器が出土しているが，まとまったものはなかった。瓦類は藤原宮式軒瓦2点が中世の溝，土壙から出土している。また，布留式土器が北半部の土壙SK3780で出土している。

まとめ

藤原宮の西に接する地域では165号線バイパスに伴う1～5次の調査により，四条条間路以北から二条条間路の間で，東西方向の条坊と西三坊坊間路が検出されている。そこでこれまで藤原宮の西辺部の調査によって検出した条坊遺構と今回検出した遺構とを合わせてみると，右京二条三坊東南坪・三条三坊東北坪は第11図のように大略の復原を行なうことができる。

二条三坊東南坪の調査区は，坪の南北方向二分割線の東約30 mおよび西二坊大路の西約30 mに位置し，そこは坪の東西の四分の一の付近にあたる。同坪内で検出した建物は8棟におよび，建物相互の切り合い関係，配置関係からみると，最低二時期に分けることが可能である。古い時期の東西棟建物SB3595は東妻の梁行3間を検出したにすぎないが，さらに北に1間のびて庇を想定すると，北の側柱筋は東西方向の中軸線にほぼ合致することになる。SB3595は，前殿と想定できるSB3580とあわせて，宅地内の中心的な建物であると考えられる。なおSB3580・3595の東妻は南北中軸線から東約20 mに位置する。

新しい時期になっても，引き続き同区域に大規模な建物が造営されている。東西両面に庇を有する南北棟建物SB3590は桁行のほぼ中央が，坪の東西方向

の中軸線に合致し，占地的にみても，宅地内の中心的な建物群の一画を形成していたことが推定できる。

上記のように新旧二時期ともに，坪の中軸線上に中心的な複数の建物が存在することから，右京二条三坊東南坪は，二時期にわたって南北に2分割されることはなく，一連の宅地割りであったことが推定できる。さらに，中心的建物の坪内の位置から考えると東西にも分割されていなかったようであり，一坪を占地した宅地であったと推定しても大過はなかろう。塀SA3575はその位置が坪の南から四分の一にあたるが，小規模であることからみると，宅地割の境界と考えるよりはむしろ宅地内を区画する施設と考えることができよう。

つぎに三条三坊東北坪では発掘面積も狭く，建物配置も二条三坊東南坪よりも，さらに不明確である。しかし，東西方向の坪二分割線上には柱間7尺の小規模な東西棟建物SB3561が建つ。塀SA3551は坪の南を画する塀SA3542の北約25mに位置し，宅地内の区画施設と考えられる。塀SA3559は東西二分割線の約5m南に位置し，北側に溝SD3560を伴っている。この塀は坪を南北に二分する施設である可能性もある。三条条間路北側溝SD3540の北1.5mには東西塀SA3542が存在し，この塀は坪の外周を区画する塀と推定される。藤原京内ではすでに第17次・19次調査（概報6・7）等で同様な遺構を検出しているが明確な遺構がないことの方が多い。宅地を外側と区画しないで使用するということは考えがたく，掘立柱塀がない場合には，築地塀などの施設が考えられよう。

今回の調査は道路敷内の限られた範囲でしか行なってはいないが，右京二条三坊東南坪内における一町の宅地割が想定できる結果を得たことは多大な成果であるといえよう。

藤原京内の宅地の実態を解明する作業は，開発の進展ともからんで急務である。しかし，いまだ坪内宅地を大規模に発掘調査した例は少なく，宅地内の様相については，まだ不明なところが多い。今回の調査で検出した二時期にわたる大規模な建物は，今後，藤原京内の宅地のあり方を考えるうえで重要な資料となるものである。

2　右京七条一坊（日高山）の調査（第40次）

（1984年３月～４月）

今回の調査は，橿原市市営住宅の改築工事に伴う事前調査として実施した。調査地は，藤原宮朱雀門南方に位置する小さな丘，日高山の上にあり，藤原京条坊では右京七条一坊東南坪にあたる。発掘総面積は約870 ㎡で，調査の結果，墳丘を失った古墳１基（日高山一号墳）を検出した。

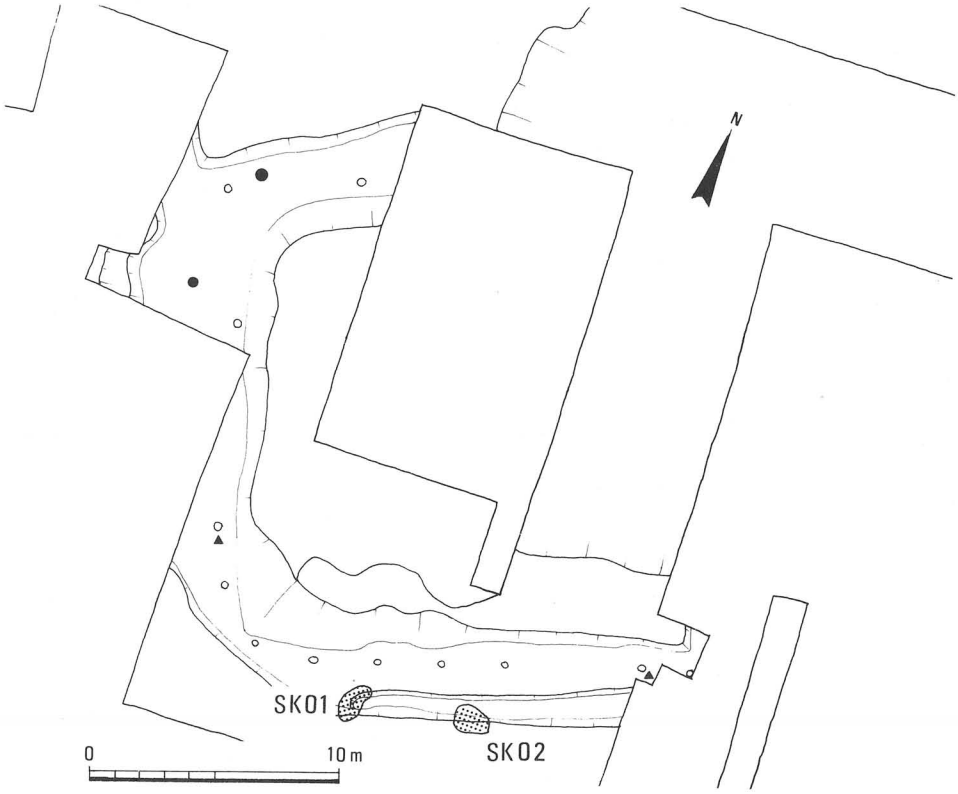
調査対象地は現在運動場で，北北西に舌状に延びる日高山の支尾根の頂部を削り，東側の谷を埋めたてて造成されている。調査区東半では，遺構の存在は認められなかった。一方，調査区西部に地山（花崗岩風化土）上に溝状を呈する部分があり，円筒埴輪が見つかった。周囲の地形は全く平坦に削られていたため，円筒埴輪の並びを探る方法で，古墳の概要を把握するに至った。

遺構

検出した遺構は，墳丘を囲む幅４～６ｍの周湟状の溝で，深さ90㎝前後が残存していた。墳丘本体は後世の削平で完全に失われている。湟は外周で一辺が23～24ｍ，内周で16～17ｍのほぼ正方形を呈し，東辺を除く三つの辺を確認した。東辺は東向きの斜面沿いにそぎ落とす形の大規模な削平で墳丘と同時に破壊されており，この上には炭化物を多く含む土層が堆積していた。

古墳は，尾根の東向き斜面の頂部付近にあって，湟は幾分東に向かって低くなるものの，ほぼ底部が水平になるように作り出されている。湟部には約2.5ｍの間隔で円筒埴輪が一列に配置されていた。円筒埴輪の数は一辺につき８本，各辺が隅の１本を共有するので合計28本が立てられていたと考えられ，このうち12本が原位置で発見された。蓋形埴輪（きぬがさがたはにわ）は２本あり，墳丘西辺の南，南辺の東で，それぞれ隅から２本目の円筒埴輪に寄り添うような状態で出土した。また，小型の鶏形埴輪が西辺北部で，大型の鶏形埴輪が，西北隅で出土し，大型の鶏形埴輪以外はほぼ原位置を保って発見された。この埴輪の年代から古墳の造営時期は５世紀中葉と判断された。

この湟は，古墳築成後間もなく埋まり始めている。このことは古墳を巡る円

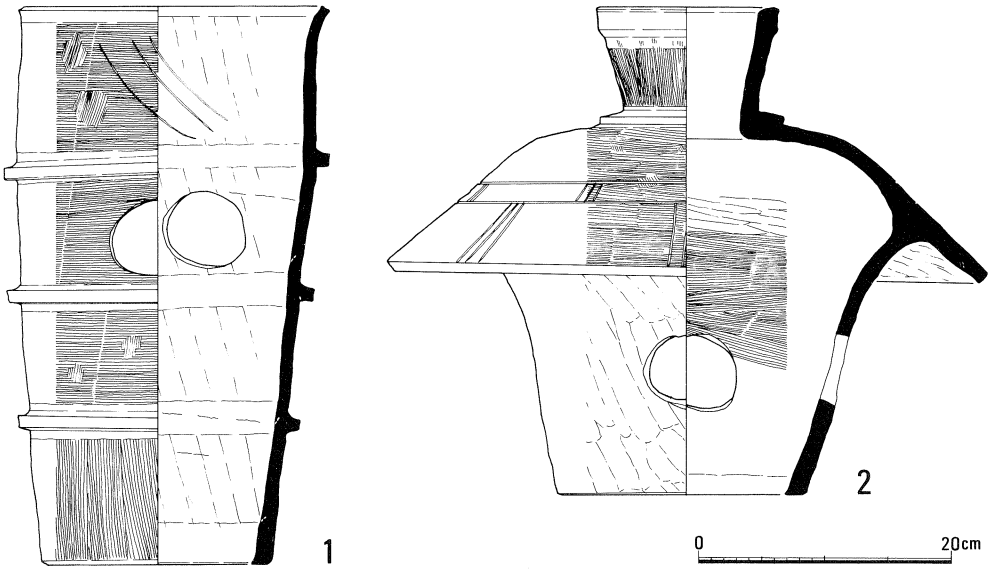


第12図　第40次調査遺構（日高山一号墳）配置図（1：300）
（○は円筒埴輪，●は鶏形埴輪，▲は蓋形埴輪）

筒埴輪の多くが，かなり良好な保存状態で埋まっていたことや，湟を埋立てた土に，6世紀初頭の埴輪がかなりの量含まれていることから，判断できる。更に，この湟埋土を切った幾つかの土壙が検出され，須恵器・土師器の完形品がそれぞれまとまって出土している。土層の状況から，古墳の削平が行なわれたのは，これら土壙が造られた時期からそう遅くはない時点である可能性が強い。

遺物

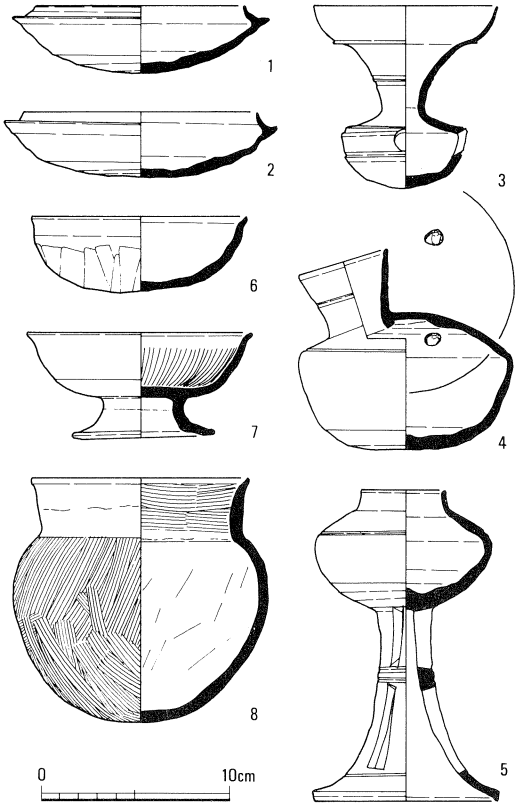
日高山一号墳に関連した遺物としては，周囲に立てられた円筒埴輪がある。円筒埴輪はいずれも高さ45㎝，下底部径16～18㎝で，3条の突帯をもち，上から2段目の区画に2つの円孔をうがつ。外面には横方向の刷毛目がつき，内面は口縁付近だけに刷毛目がある。成形の特徴及び焼成時に黒斑がつくことから，年代は5世紀中葉と推定され，当然これが一号墳の時期を示すことになる。円筒埴輪には口縁部外面に記号をもつものがある。2個の蓋形埴輪は，蓋部にわ



第13図　日高山一号墳出土埴輪（１；円筒埴輪，２；蓋形埴輪，１：６）

ずかな表現の違いはあるが，同形・同工で，径50㎝，高さ40㎝程である。鶏形埴輪は，頭部のみの大型のものと，台までそろった小型の２個体があり，小型のものは体長35㎝ほどで尾羽・翼を線刻で表現している。

このほか，内湟には，６世紀前半代の円筒埴輪・家形埴輪・蓋形埴輪などの破片がかなりの量流れ込んでいる。湟が埋まった後，これを切り込んで，土壙が作られている。南辺西寄りの土壙（SK01）からは６世紀後半代の須恵器杯・甕・提瓶・長脚２段透し高杯・無蓋高杯が出土した。南辺西寄りの土壙（SK02）からは土師器杯・甕・脚付杯，須恵器



第14図　土壙ＳＫ０２出土土器（1：4）

杯・短頸壺・平瓶・甕などが出土した（第14図）。SK02出土の土器は，7世紀初頭に属し，少数ながら各器種揃った良好な一括資料である。埴輪・土器類以外の遺物としては，湟埋土最下部から出土した馬具小片（木芯鉄張輪鐙か）と，最上部に含まれていた金銅製耳環1点がある。

まとめ

今回検出した日高山一号墳は5世紀中葉に作られた方墳である。日高山の北西端部の尾根の頂部付近の東斜面を幅4～6m，深さ1m程の掘り込んで区切り，一辺約18mの方形の墳丘を造り出している。古墳の南北軸は，これが作られた尾根の方向に添うように，北北西を向いている。

埋葬主体部を含む墳丘は後世の削平で破壊されている。削平は，旧地形に沿って西から東へ斜めに下がるように行なわれており，湟の東辺は残っていない。湟の西半部は，ほとんどもとの深さを残しているものと見られ，特に西南隅付近は，墳丘裾の一部も含んで溝の旧状を保っている様子が認められる。湟埋土を切って作られた土壙の年代とを考え合わせると，古墳の破壊が藤原京の造営工事によったものである可能性は非常に大きい。

これまで日高山北裾から藤原宮にかけての地域では5世紀初頭から6世紀前半までの各時期の埴輪が出土しており，この付近に埴輪を伴う古墳が存在したと推定されてきた。その際日高山は第一番の候補地として考えられていた。

今回明らかになった日高山一号墳は，この推定を実際に裏づけるものであり，これまで古墳分布の空白地帯であった藤原宮域周辺で，初めて遺構の上で確認された古墳ということになる。そのほか，6世紀前半代の埴輪や6世紀後半～7世紀初頭頃の完形の須恵器群・金銅製耳環が出土し，該当時期の古墳の存在を強く暗示している。

今回の調査によって，日高山山上に一号墳をはじめとして各時期の複数の古墳が存在していた確証を得たこと，そしてこれらの古墳の破壊に，藤原宮・京宮・京の造営が深く関与している様相が明らかになったことは大きな成果といえよう。

3　右京二条二坊の調査（第42次）

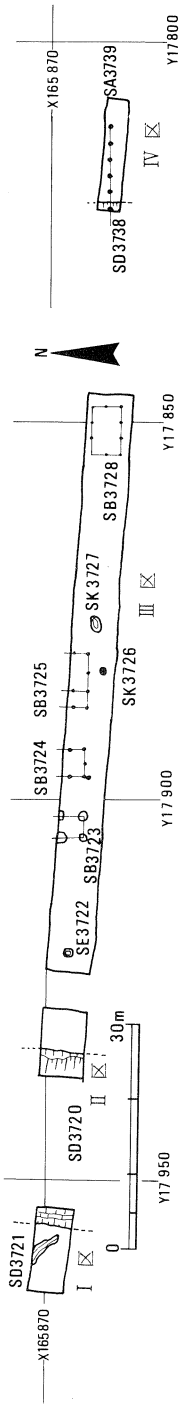
（1984年４月～５月）

この調査は，165号線橿原バイパス建設工事に伴う国鉄桜井線の高架工事に関連して行なったもので，同関連調査としては第５次目にあたる。調査対象地は醍醐の集落の北西で，国鉄桜井線の南側にそって幅10ｍ，東西長約180ｍの範囲である。このうち，西側からⅠ区（５×11.5ｍ），Ⅱ区（６×９ｍ），Ⅲ区（６×77ｍ），Ⅳ区（３×15ｍ）の調査区を設定した。Ⅰ区は西二坊大路，Ⅱ区は藤原宮西北隅の調査（第36次，概報14）で検出した宮北面・西面外濠の合流後の流路の北延長位置にあたる。Ⅲ区は右京二条二坊西北坪の宅地遺構，Ⅳ区は西二坊坊間路が想定された（第11図参照）。

＜Ⅰ区＞　堆積土は，水田耕土・床土・遺物包含層であり，地表下約85㎝で自然堆積土の茶褐色粘質土となる。遺構は茶褐色粘質土面で検出した。検出した遺構は南北大溝ＳＤ3720，斜行溝ＳＤ3721の他，南北小溝がある。ＳＤ3720は，西岸から幅約２ｍ分を検出した。東端部での深さは約１ｍである。堆積土は大きく上下２層ある。上層はさらに灰褐色砂質土と黄褐色砂質土に分けられるが，いずれも非常に堅くしまっており，溝を埋めたてた土と思われる。下層は青灰色粘土である。上下層とも，７世紀～13世紀の土器類が出土しているが，量的には少ない。上層で三彩陶器小片が出土した。調査区の中央北から南東方向にかけては，不整形で，浅い斜行溝ＳＤ3721がある。ＳＤ3721の埋土の暗褐色粘土からは縄文晩期の土器が出土した。南北小溝は瓦器を含む。

＜Ⅱ区＞　堆積土の状況はⅠ区と同様である。検出遺構は南北大溝ＳＤ3720の東岸部の他，南北小溝がある。南北大溝ＳＤ3720は，東岸から幅約３ｍまでを検出した。西端で深さ約１ｍである。堆積土は上層が茶褐色粘質土・暗褐色粘質土，下層が暗灰色粘質土である。７世紀から13世紀までの土器類が少量出土した。南北小溝はいずれも瓦器を含む。

＜Ⅲ区＞　堆積土は耕土・床土・遺物包含層・茶褐色粘質土だが，東半は茶褐色粘質土上に薄い灰褐色砂層がある。検出した遺構には，掘立柱建物４，井



第15図　第42次
調査遺構配置図
（1：1000）

戸1，土壙2，南北・東西小溝などがある。このうち，建物SB3723，土壙SK3727が藤原宮期と思われ，他の遺構は平安時代末から中世にかけてのものである。掘立柱建物SB3723は梁行1間の南北棟と思われ，桁行は南端1間分を検出した。柱間は3ｍ（10尺）等間である。柱掘形は1.2～1.4ｍ四方と大きい。掘立柱建物SB3724・3725・3728の柱穴のいくつかは東西・南北小溝の堆積土上から検出しており，これらの建物は小溝より時期的に新しい。柱掘形は径15～20㎝の円形をなすものが多い。SB3724は桁行2間以上，梁行2間の南北棟建物で，柱間はほぼ1.8ｍである。SB3725は桁行2間以上，梁行2間の身舎に西庇を持つ南北棟建物で，柱間は桁行2ｍ，梁行2.6ｍ，庇の出2.1ｍである。SB3728は桁行3間，梁行2間の東西棟建物で，柱間は桁行2.1ｍ，梁行1.9ｍである。土壙SK3727は東西2ｍ，南北1.4ｍの楕円形を呈し，深さは20㎝である。7世紀後半～末の土師器・須恵器が少量出土した。土壙SK3726は径1ｍ，深さ40㎝の円形で，11世紀後半に属する土師器・瓦器が出土した。井戸SE3722は東西1ｍ，南北1.3ｍの楕円形で，深さ1.5ｍの素掘りの井戸である。土師器・須恵器・瓦器が少量出土した。南北・東西小溝はいずれも瓦器を含む。大半は南北溝が東西溝より新しい。Ⅲ区出土のその他の遺物には土牛脚部，フイゴ羽口，石庖丁などがある。

＜Ⅳ区＞　Ⅲ区東半と同様，茶褐色粘質土面上に灰褐色砂層がのる。検出遺構は東西塀SA3739，南北溝SD3738である。SA3739は5間以上の東西塀で，径40㎝の円形柱掘形をもち，柱間はほぼ2.1ｍ（7尺）である。茶褐色粘質土面で検出したが，灰褐色砂層から掘り込まれている。東端の柱穴は南北溝と重複し，これより新しい。南北溝SD3738は東岸

から幅約１ｍを検出した。西岸は調査区外であるが，底部の状況からみて，溝幅は1.5ｍほどであろう。深さは15㎝と浅い。７世紀後半の土師器・須恵器が出土した。

＜まとめ＞　今回の調査区は東西に長いものの，南北幅が狭いこともあり，藤原宮期のまとまった遺構は明らかにできなかったが，宮北方地域の状況について，いくつかの点が明らかとなった。Ⅰ区では西二坊大路の西側溝が想定されたが，今回の調査区内では検出できなかった。調査区のさらに西側になると思われる。Ⅰ区東端及びⅡ区西半で検出した南北溝は，埋土の状況や深さ，出土遺物などからみて，同一の溝と考えられた。そうすると，溝の幅は23ｍとなる。藤原宮西北隅の調査（第36次）では西面・北面外濠の合流点から西北方向へ流路が続くことがわかり，外濠の水は西二坊大路の東側溝へ注ぐことが推測された。そして，宮西北隅では西外濠に東から自然河川が合流しており，13世紀ごろまで流路であったことから，外濠の幅は17ｍ以上に広がっていた。今回検出した南北大溝ＳＤ3720は，この流路の北延長部にあたるものと考えられる。北流するにつれ，溝幅が徐々に広がり，中世には西二坊大路の路面東半の位置にまで及んでいたのであろう。Ⅲ区で想定した宅地遺構は，今回の調査区内では極めて少なかった。坪の南辺にあたっていることにもよるのであろう。ＳＢ3723の位置から南方約35ｍには「長谷田土壇」が存在しており，土壇北辺あたりは坪境推定線（二条条間路）ともなっていることなどから，今後，この周辺での調査が期待される。藤原宮期以降の遺構としては南北・東西小溝の埋土面から検出した小規模な掘立柱建物群がある。これらの時期については，小溝出土遺物からみて，13世紀以降と思われる。古代末～中世以降の土地利用の点から，小溝とともに今後その時期・性格を明らかにしていく必要があろう。Ⅳ区で検出した南北溝ＳＤ3738は位置的には西二坊坊間路の東側溝にあたる。しかし，溝中の出土土器は，藤原宮期より古い時期のものに限られており，この溝が宮期には埋まっていた可能性がある。今回の検出範囲は小規模であり，小路の確認は今後の調査に待ちたい。

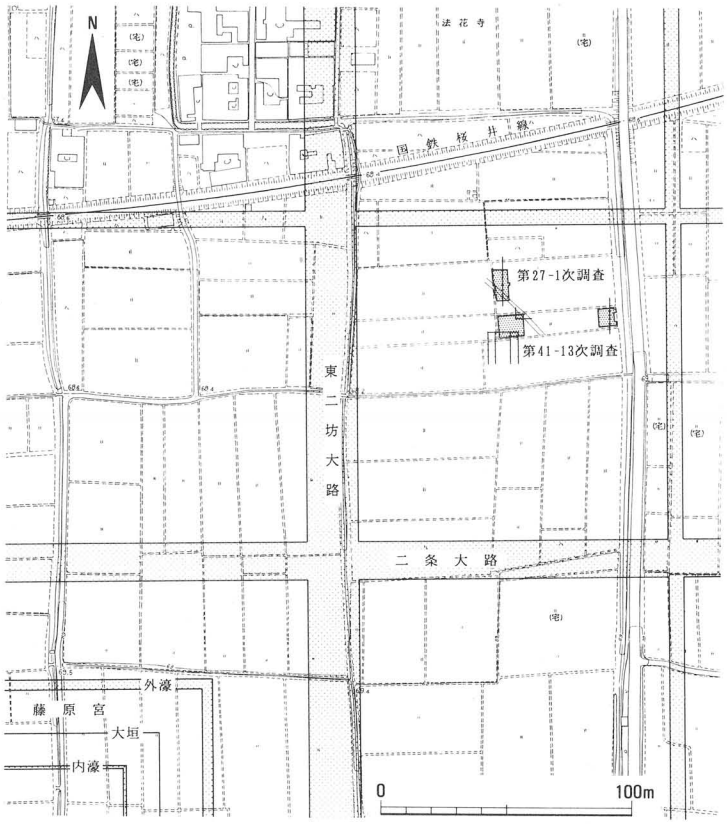
4　左京二条三坊の調査（第41―13次）

（1984年12月）

調査地は国鉄桜井線の南80ｍ，市道耳成小山線ぞいの東西に細長い水田で，条坊の呼称では，左京二条三坊西南坪のほぼ中央部を占める。今調査地に北接する水田では，かつて小規模な調査を実施し（第27―１次，概報10），坪を東西に二分する位置に南北塀を検出している。

調査は，水田東端（東区）と先の南北塀ＳＡ2610の南延長線上にあたる水田西端（西区）とに調査区を設定し，坪内宅地の利用状況を明確にする目的で実施した。

層序は，耕土・床土・灰褐色土で，灰褐色土の下が藤原宮期の遺構検出面となる。検出面は西に低く，東に高い傾向にあり，東区東半では黄褐色粘土の地山が露呈するが，東区西半から西区までは，地山の上に古墳時代初頭までの遺物包含層である黒褐色礫混り粘土・灰色砂が広がっている。なお，西区南半には，上記包含層の下に，地山をうがった暗青褐色粘土の深い落ち込みがあり，沼状をなしている。



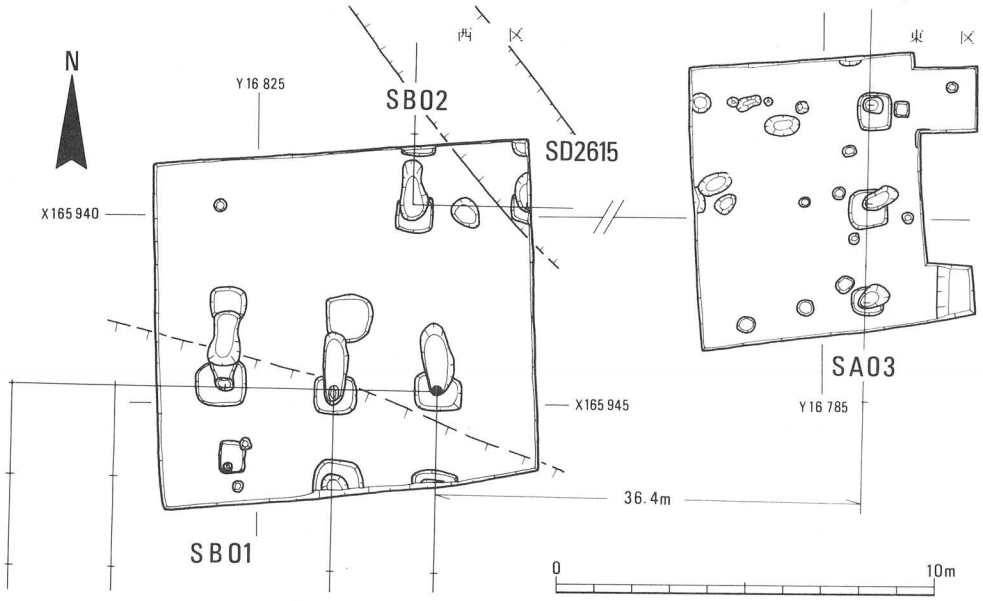
第16図　第41－13次調査位置図（1：3000）

検出した主な遺構には西区に藤原宮期の建物２棟，東区に

南北塀１条がある。

西区南半で検出した掘立柱建物ＳＢ01は，その北端の一部を確認したにとどまるが，柱穴の配置から，東西に庇を持つ南北棟建物と考えられる。柱掘形はいずれも方 1.2 ～ 1.4 ｍと大形で，北あるいは東からの長大な抜取穴がある。東庇北端の柱穴には，直径約29㎝の柱根が長さ30㎝余遺存していた。また，北妻柱抜取穴には一部掘形底を突き破る状況で建築部材が遺存していた。幅25㎝，長さ 1.2 ｍ，厚さ12㎝の板材で，短辺の一方は柱径に合う半円弧をなし，もう一方は直線をなす。また，一長辺は幅２㎝，深さ６㎝の段をなしており，床板を受ける仕口と考えられる。

柱抜取穴および柱根から復原される柱間は身舎梁行が 2.9 ｍ，庇が 2.7 ｍ，桁行 2.4 ｍである。この建物の柱および柱穴規模や構造は，宮の殿舎に匹敵するものであり，藤原宮期の同坪内での主殿・脇殿級の建物とみられる。ＳＢ01の北にある２個の柱穴については，掘形が方 1.2 ｍ，深さ 1.1 ｍと大形で，ＳＢ01の柱筋とほぼ揃う位置にある。北庇の可能性もあるが，ＳＢ01の東庇柱の北に柱穴はなく，また柱穴の深さと埋土が建物ＳＢ01のそれと異なること，柱穴



第17図　第41 － 13 次調査遺構配置図（1：200）

の抜取穴が建物妻柱抜取穴を壊していることなどから，直接SB01と一体をなすものとは考えがたい。その性格は不明である。

西区北東隅の建物SB02も東西・南北各1間分を検出しただけで，規模・構造は明らかでない。柱掘形は方1m，深さ45cmで，抜取穴には凝灰岩質砂岩片が含まれている。東西柱間3m，南北柱間2m余で，SB01とは約4.8m離れていて，柱筋は通らない。SB01とともに北でやや東に振れる傾向にある。

西区の遺構にはほかに，灰色砂を埋土とする古墳時代初頭の斜行溝SD2615，直径20cm程の小穴があるが，第27－1次で検出した南北塀SA2610の南延長部は検出されなかった。

東区の南北塀SA03は柱穴3個を確認しただけであり，建物の可能性もある。柱掘形は方形を呈し一辺1m，深さ45cmで，北からの抜取穴がある。柱は直径20cm余である。柱間は2.6m等間に復原できる。柱抜取穴から藤原宮期の土師器杯・甕等が出土した。塀の柱穴埋土・規模等は西区のSB02のそれとよく似ており，両者は同一時期の遺構である可能性が高い。なお塀は，西区のSB01東庇柱列と約36.4m離れた位置にある。東区にはこのほかに，時期不明の方形小穴や，中世の遺構と思われる円形小穴等が散見する。

今回検出した建物とりわけSB01は坪内の中心的建物群の一部を構成するものである。その位置を推定条坊との関わりで検討しておくと，妻柱が，条坊道路心々距離の二分の一に，東入側柱列が道路分を差し引いた坪内の二分の一にほぼ一致する。また，北側柱列は，推定二条大路心の北約90mにあって，坪の三分の一に一致しており，建物は坪のほぼ中央部を占めている。南北棟建物が坪の中心に位置することの理解については，南北棟が主殿となる場合，坪の中心をはずれて主殿がある場合，宅地が坪を越えた範囲を占めている場合等々，さまざまな可能性が考えられ現段階では確言できない。今調査では，宮周辺の坪内で大規模な建物を確認したのであり，宮を挟んで対称位置にあたる第39・43次調査例とともに藤原京の宅地割・建物配置を究明する上で貴重な資料となろう。実態の解明は今後の周辺地の調査を待って検討したい。

5　藤原京その他の調査概要

a　左京十二条三坊東南坪の調査（第37－15次）

（1983年12月）

この調査は住宅建設の事前調査として高市郡明日香村雷で実施した。調査地は藤原京左京十二条三坊東南坪にあたる。また，雷丘の南側末端に位置し，山田道に面している。調査は東西４ｍ，南北２ｍのトレンチを設けて行なったが，地表下約25㎝で花崗岩風化土（地山）が現われ，遺構は検出されなかった。

b　左京十二条三坊西南坪の調査（第37－16次）

（1983年12月）

この調査は農業倉庫新築に伴う事前調査として，高市郡明日香村雷で行なった。調査地は藤原京左京十二条三坊西南坪にあたる。また，調査地は雷丘の東南約120ｍの地点で，西約70ｍには飛鳥川が流れている。調査は東西３ｍ，南北３ｍのトレンチを設けて実施した。地表下約60～70㎝は近現代の遺物包含層で，それ以下は青灰色砂・灰褐色粗砂層である。この青灰色砂層を切って灰色砂混りバラスを埋土とする土壙状の落ち込みを検出したが，出土遺物(瓦・土器)は細片で極めて摩滅している。調査地は，地形からみて飛鳥川の氾濫原にあたり，検出遺構はいずれも河川の氾濫によって形成されたと考えられる。

c　左京二条三坊の調査（第37－18次）

（1983年12月）

この調査は変電所建設に伴う事前調査として，橿原市高殿町で行なった。調査地は藤原京左京二条三坊西北坪にあたり，一条大路南側約30ｍに位置する。調査地東方約15ｍの地点は1983年にすでに発掘されており(第36－４次)，一条大路南側溝推定地であったが，側溝は確認されていない。今回の調査は，東西３ｍ，南北10ｍの発掘区を設けて実施した。調査区の基本層序は上から，

造成土，旧水田耕土，水田床土，灰褐色粘質土，灰色砂（地山）となり，遺構は灰褐色粘質土上面で幅45～60㎝，深さ約15㎝の東西溝１条を検出した。出土遺物から，この東西溝は中世以降の水田耕作にかかわる遺構と推定される。藤原宮期の遺構面はすでに削平されたものと考えられる。

d　左京十条三坊の調査（第41－１次）

（1984年４月）

この調査は住宅の増築工事に伴う事前の発掘調査として，高市郡明日香村大字小山において行なった。調査地は飛鳥岡本宮推定地の西に近接するとともに，藤原京左京十条三坊地内にあたる。調査は東西６ｍ，南北1.5ｍの調査区を設定して行なった。検出した遺構は，東西・南北方向の小溝であり，この中から近世の陶磁器が出土した。このことにより当調査地は後世に大きく削平されていることが判明した。

e　右京二条一坊の調査（第41－２次）

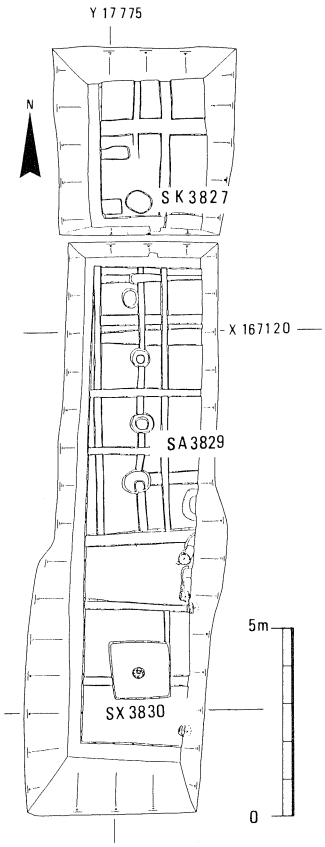
（1984年４月）

本調査は住宅建設の事前調査として橿原市醍醐町で行なったものである。調査地は耳成山の南方で，藤原宮の北約200ｍに位置し，藤原京条坊の右京二条一坊西南の坪にあたる。調査は東西2.5ｍ，南北1.5ｍのトレンチを設定して行なった。検出した遺構は柱穴１，土壙１，溝３である。２本の南北溝は中世の耕作にかかわる素掘り溝で，東西溝は地山を切りこむ。柱穴・土壙は東西溝と重複するが，溝より古い。柱穴は建物もしくは塀となるであろうが，調査地の制約により拡張できず，どのようにまとまるのかは不明である。出土遺物も少量で，時期を確定するにはいたらないが，柱穴は藤原宮期のものと考えられよう。藤原宮北方の地域は園池の存在が考えられているが，何らかの構築物が存在したことを確認できたことは意義深いであろう。

f　右京七条二坊東北坪北部の調査（第41－3次）

（1984年4月）

この調査は飛騨老人憩の家新築に伴う事前の発掘調査として，橿原市飛騨町において行なった。調査地は，藤原京右京七条二坊地内にあたる。調査は南北20ｍ，東西4ｍの調査区を設定して行なった。主な検出遺構は藤原宮期の南北塀・柱穴と土壙である。他に中世の東西・南北方向の小溝がある。調査区南側の柱穴SX3830は，一辺1.4ｍの方形掘形で，中央に柱根（残存高90㎝，直径30㎝）が残存していた。この柱は東西塀かあるいは東西棟建物の北側柱の一部であろう。調査区の中央には南北塀SA3829がある。柱間2間（柱間寸法1.7ｍ）で，柱穴掘形は直径50～60㎝の円形を呈し，中央に柱痕跡（直径20～30㎝）がみられる。東西建物の梁行となる可能性もある。これらの柱穴の掘形からは藤原宮期の土器が出土した。調査区北側の円形土壙SK3827は直径60㎝，深さ30㎝であり，内から藤原宮期の土器が出土した。



第18図　第41－3次調査
遺構配置図（1：200）

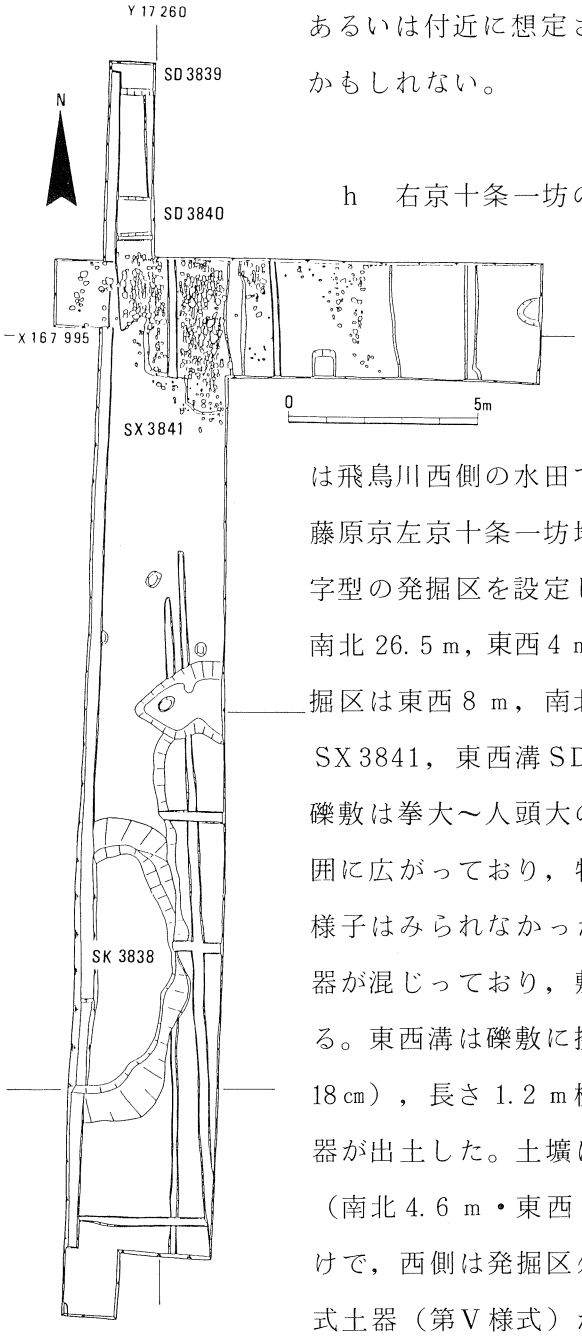
今回の調査区は狭小であったため，検出遺構がいかなるものかを明らかにすることができなかった。

g　右京二条二坊の調査（第41－4次）

（1984年5月）

本調査は住宅新築に伴う事前調査として橿原市醍醐町で行なったものである。調査地は耳成山の南方，藤原宮の北約270ｍに位置し，藤原京条坊の右京二条二坊東北の坪にあたる。調査は南北8ｍ，東西2.5ｍのトレンチを設定して行なった。検出した遺構は溝1，柱穴1である。溝は床土直下から切り込む新しい時期のものである。柱穴は径30㎝の小規模なもので，柱痕を残すが，杭程度のものと考えられる。本調査地では，付近一帯で認められる中世素掘り溝が検

出されていないため，後世の削平を被ったものと考えている。しかし，地山直上の包含層からは藤原宮期と考えられる丸・平瓦片が整理箱１箱分出土しており，さして瓦の出土をみない藤原京域としては瓦の出土量の多さが注目される。あるいは付近に想定されている醍醐廃寺と関連するものかもしれない。



第19図　第41－５次調査
遺構配置図（1：200）

h　右京十条一坊の調査（第41－５次）

（1984年５月）

この調査は露天駐車場造成に伴う事前の発掘調査として，橿原市田中町において行なった。調査地は飛鳥川西側の水田で，田中宮跡に近接するとともに，藤原京左京十条一坊地内にあたる。調査は南半部に逆Ｌ字型の発掘区を設定して行なった。南北方向の発掘区は南北 26.5ｍ，東西４ｍで，北側で東に接する東西方向の発掘区は東西８ｍ，南北３ｍである。水田下50㎝で礫敷ＳＸ3841，東西溝ＳＤ3840，土壙ＳＫ3838を検出した。礫敷は拳大～人頭大の石が南北４ｍ，東西９ｍ以上の範囲に広がっており，特に整然と敷き並べたというような様子はみられなかった。礫敷の中には藤原宮期の瓦や土器が混じっており，敷石の下は地山が20㎝ほど窪んでいる。東西溝は礫敷に接して北側にあり（幅 1.1ｍ，深さ18㎝），長さ 1.2ｍ検出した。溝中からは藤原宮期の土器が出土した。土壙は発掘区の南側にあり，東側の一部（南北 4.6ｍ・東西２ｍ以上，深さ40㎝）を検出しただけで，西側は発掘区外に拡がっている。土壙中から弥生式土器（第Ⅴ様式）が多量に出土した。

今回検出した藤原宮期の遺構の性格については明らか

にしえなかったが，この近辺に関連遺構が存在している可能性が高く，今後この周辺の地域での調査を計画的におこなう必要がある。

i　西京極（十条）・下ツ道の調査（第41－6次）

（1934年7月）

この調査は貸店舗レストラン建設に伴う事前の発掘調査として，橿原市久米町において行なった。調査地は藤原京西京極に位置し，また大和古道の下ツ道に接している。調査は東西20ｍ，南北4ｍの発掘区を設定して行なった。調査地の地山面は西側に向けて傾斜しており，この上に厚い堆積土が見られる。この部分の土層は，床土の下は灰茶褐色土層（40㎝）で，7～8世紀の土器を含んでいるが，その下には人工遺物を含まない粘性土・砂質土が1ｍ以上互層をなしている。

検出した遺構は南北方向の小溝（幅30㎝，深さ22㎝）で，検出面は灰茶褐色土上面である。溝中からは7～8世紀の土器が出土した。

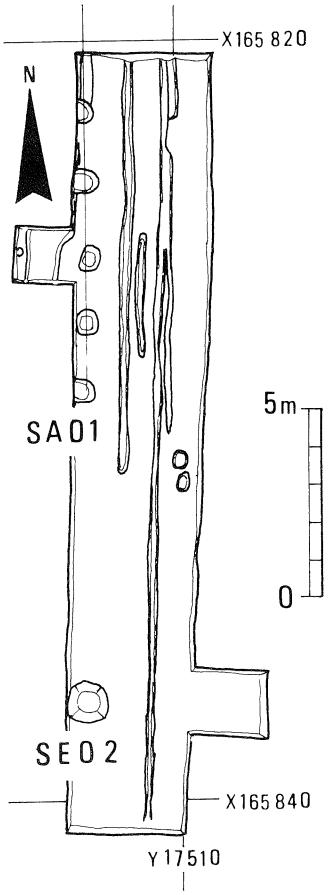
今回の調査区内においては藤原京西京極・下ツ道に関連した遺構を検出することができなかったが，この付近の旧地形を知る手掛りを得ることができた。

j　右京二条一坊の調査（第41－7次）

（1984年7月）

調査地は橿原市醍醐町で，国道165号線と国鉄桜井線との間の南北2枚の水田である。調査は各田の北側に3×20ｍの南北トレンチ（北区・南区）を設けた。北区は藤原京一条大路，南区は二条一坊東北坪の宅地遺構が想定された。

北区は地表下約70㎝で自然堆積土の黄褐色粘質土となり，この上面で遺構を検出したが，調査区南端5ｍは下層の灰色砂層があらわれている。遺構は多数の東西・南北方向の小溝と小穴5である。小溝は幅30～50㎝，深さ10～20㎝で，東西溝がおおむね古い。溝出土の土器には藤原宮期のものも見られるが，いずれも遺物が少量であり，時期を決定するのには十分でない。小穴についてもまとまりがなく，時期も不明である。遺物包含層からは土馬片（藤原宮期）が出土している。



第20図　第41－7次調査
遺構（南区）配置図（1：200）

南区は北区の南約40ｍで，東北坪のほぼ中央部分にあたる。遺構検出面は北区と同様黄褐色粘質土であるが，調査区北端６ｍ分は灰色砂層となる。遺構面の深さは地表下約40㎝である。遺構は南北塀１（SA01），井戸１（SE02），南北小溝などである。塀SA01は４間以上で，柱間は約1.8ｍ（６尺）である。柱掘形は50～60㎝四方であるが，深さは約10㎝とごく浅い。出土遺物がなく，時期不明である。井戸SE02は径約１ｍの円形素掘り井戸で，深さは１ｍである。埋土から藤原宮期に属する土器が少量出土した。

今回の調査では，北区に想定した一条大路は検出することができなかった。南区にくらべて，自然堆積土面が約30㎝も低く，また南区の塀の掘形の深さなどからみて，後世，この一帯はかなり削平を受けたようであり，大路の側溝も削平を受けた可能性が強い。南区では建物は未検出ながら，藤原宮期の素掘り井戸を検出した。これにより，井戸周辺に藤原宮期の遺構の存在が考えられる。この一帯はかなりの削平を受けてはいるものの，今後，周辺での調査で大路，坪内宅地遺構の検出が期待される。

k　右京一条二坊の調査（第41－９次）

（1984年９月）

調査地は橿原市醍醐町の国道165号線に南接する水田で，地目変更で埋立が行なわれることになったため，事前調査を実施した。現地は藤原京右京一条二坊東南坪にあたり，一条大路等条坊に関連した遺構が予想されたが，今回の調査では，藤原宮期にさかのぼる遺構は認められなかった。調査区は水田東部に２ｍ×18ｍの南北トレンチ，その中央部から西へ延びる２ｍ×13ｍの東西トレ

ンチからなり，発掘面積は約60㎡である。区内の層序は耕土，床土，灰褐色土，暗褐色粘土の無遺物層となっていて，水田面から暗褐色粘土上面までの深さは90㎝前後で，この暗褐色粘土は水田西端付近で弥生包含層に移りかわる。検出した遺構は縦横に走る中世小溝と，やはり中世と考えられる柱掘形数個のみであり，いずれも最下層の暗褐色粘土上面から切り込まれていた。この地域に藤原京にかかわる遺構があったとしても，小溝がつくられた時期までに削平破壊されてしまった可能性が強いとみられる。

l　右京七条二坊東北坪南部の調査（第41―10次）

（1984年9月）

この調査は橿原市飛騨町で住宅新築工事に先立って実施したもので，東西2m，南北6mの範囲を対象とした。調査地は藤原京条坊の右京七条二坊東北坪にあたる。調査区の土層層序は耕土，灰褐色粘質土，暗灰粘質土，明黄褐色粘質土，黄褐色砂礫土の遺構面（地山）となる。地山面はかなり南に低く傾斜している。

検出した遺構は，中世のものと考えられる東西溝1条で，藤原宮期の遺構は検出されなかった。

m　右京三条二坊の調査（第41―11次）

（1984年10月）

調査地は橿原市醍醐町に所在し，かつて第33―3次調査(概報12)で二条大路南側溝SD3201と二坊坊間路西側溝SD3207の曲り角を検出した地点の直西約50mの住宅建設予定地内である。調査区内で二条大路南側溝の一部を検出した。調査は東西2m，南北6mの範囲を対象とした。調査区内の基本的な層序は耕土・床土・灰褐色土・褐色粘土・黄褐色粘土となっていて，この上に約50㎝の厚さの客土が置かれていた。遺構としては旧耕土面下30㎝の灰褐色土上面から切りこむ中世掘立柱建物の一部と，耕土面下約40㎝の褐色粘土面で検出した2条の東西方向の溝状遺構がある。2条の溝は約2mを隔てて並行し，ほぼ

同じ規模を持つが，南側のものは調査区東端で浅く狭くなっていた。埋土の様相と位置から北側のものを二条大路南側溝SD3201の一部と判断した。溝は上半部を削られ，幅約60㎝，深さ約20㎝程が残されている。溝心は国土方眼のX＝－166050.800 m（Y＝－17887 mライン上で）付近に求められる。

n　右京二条三坊東南坪の調査（第41－14次）

（1984年12月）

この調査は住宅新築に伴う事前調査として，橿原市醍醐町で行なった。調査地は藤原京右京二条三坊東南坪にあたり，先に行なった第43次調査区の西側に接している。調査は東西4 m，南北2 mの8 ㎡を対象として実施した。調査区の土層層序は上から，水田耕土，床土の下に灰褐色砂質土（厚さ10㎝），黒褐色粘質土（厚さ20㎝）と続き，黄色粘土と灰黒粘土からなる地山層に至る。遺構には灰褐色砂質土上面で検出した東西小溝2条，黒褐色粘質土上面で検出した東西小溝5条，南北小溝7条，土壙1，小穴1がある。このうちの土壙は径75㎝，深さ90㎝で，暗灰色の粗砂で埋る。底近くより布留式土器の甕2個体が出土した。藤原宮期の遺構は検出されていないものの，少量の土器片が出土している。また黒褐色粘質土からはサヌカイト剥片が1点出土した。

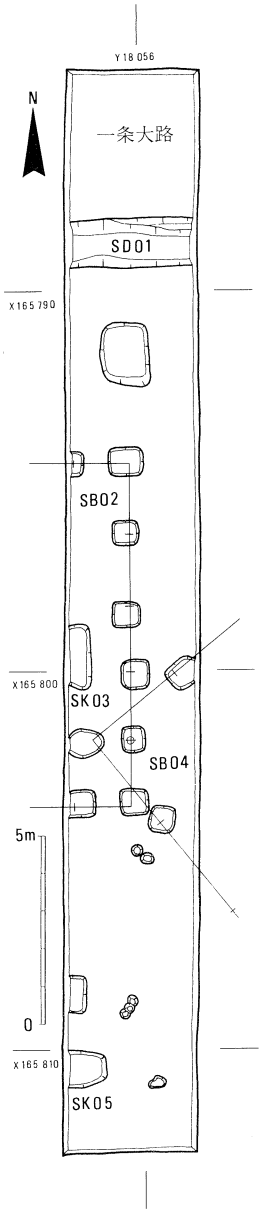
o　右京二条三坊東北坪の調査（第41－16次）

（1985年3月）

この調査は店舗新築にともなう事前調査として，橿原市醍醐町で行なったものである。調査区は右京二条三坊東北坪および一条大路の想定位置にあたる。調査は南北28.5 m，東西3.5 mの100 ㎡を対象として実施した。調査区の基本的層序は，水田耕土（厚さ15㎝），床土（厚さ25㎝），灰褐色粘質土（厚さ15㎝）と続き，灰色砂からなる地山面に至るが，地山上に黒褐色粘土（厚さ10～20㎝）が堆積する部分もある。遺構は地山面と黒褐色粘土面で検出した。

藤原宮期の遺構には東西溝SD01，掘立柱建物SB02，土壙SK03がある。調査区の北よりで検出したSD01は現状で上幅1.3 m，深さ0.3 mである。堆

積層は上層より茶褐色粘質土，黒灰色砂質土であり，少量の土師器・須恵器が出土している。調査区中央に位置するSB02は桁行5間，梁行1間以上の南北棟である。柱穴は浅く，底近くがごく僅かに残る程度である。SB02北妻から東西溝SD03の南上端までの間隔は5.2 mある。調査区中央のSK01は調査区内での南北径1.7 m，深さ0.6 mでさらに調査区外に広がっている。上部には暗灰色の砂，下部には灰黒色の粘土が堆積し，それらの埋土から若干の土師器・須恵器が出土している。



第21図　第41－16次調査遺構配置図（1：200）

藤原宮期以前の遺構には土壙SK05，掘立柱建物SB04がある。調査区南寄りの黒褐色粘土層上面で検出したSK05は，調査区内での南北径1.0 m，深さ0.3 mで，さらに西へ広がっている。縄文時代後期後半の土器が少量出土している。なお，調査区の北半と南半に広がる黒褐色粘土層からも，縄文時代後期の土器，サヌカイト剥片が出土している。調査区のやや南よりで検出したSB04は真北に対して東に約50°ふれる。柱間寸法は2.8 mを測るが，さらに調査区外にのびるため，全体の平面形は明らかでない。埋土の状況から，藤原宮期以前の古墳時代の建物と考えられる。なお，藤原宮期以降の遺構として，調査区の全体で素掘り小溝を検出している。

東西溝SD01は一条大路南側溝の想定位置に合致し，規模・形状・出土遺物の上からもこれに相当するものと考えられる。従来，一条大路については第37―18次調査・第41―7次調査(概報15)等でその推定地についての調査を実施してきているが，その確認には至っておらず，今回初めてその資料を得ることができた。今後，周辺地での調査が期待される。